



中村俊定文庫  
文庫 18  
509  
1





尾張曉臺先生訂正

太來抄

東奥門人吞溟校

去來抄叙



芭蕉其翁少少ひ其の道平斧ふかへ  
屋敷をうち曲れを於俳諧の生ころを  
傳へてより存其草を抄均へ一派  
八隅ふくま支流湧くこく終平川木わらふ  
わらふも菜摘女と耳小婦と早出の時風調  
を〜〜〜泥ま〜〜〜を模してなり

序



穿て風體を折き感説十勢一々今時  
平地より波濤を起し其弊を擧げしむる  
いぢり我を來う魚あるを此抄抄く  
漢へ吞舟の魚をとりて事ありれども

安永三甲午十月

曉臺



去来抄上



先師評

外人の評有といふも先師の一言より  
も然りけり記也

蓬萊にまうたりや伊勢のたけい俊 芭蕉

深川より此文もいふさあくの評あり汝いづ園傳る也とあり  
去来曰都又い言々の便ともあり伊勢と傳るハ元目然  
式のそやうありぬま非代をおもひいさうたより安永と  
道祖神乃ちや箇中をさういふは終つてそを兼傳はる  
先師返りしに汝ら園くまよみたるをん今日神のか  
くしをありとねもひ出て慈徳和尚の詞もたより初の

上

一



一字を吟し清淨のうらみまを草葉ふ對して結ひる也と

かゝるも松花より臆めて 芭蕉

或人みそ苗りの難あらんやと云其角答曰みそい哉みかよふ  
ゆゑ哉苗は漢句よにそ苗の才を嫌ふといふ句切  
迫れいめと云傳るとなり 呂九曰めそ苗のくは其角の  
解あり又是を才三の句なりいかに漢句とをなしたまふや  
去来曰是ハ即真盛偶めて漢句なるより疑ふ一才三ハ  
句案を渡るも一旬案をくは才三をよそ人先師きて曰  
其角去来ハ辨皆理屈なりおいたる花より松の撞き面白  
うりーのこなりと

けりまはあまを人となしける 芭蕉

先師曰尚白ハ難に近江ハ丹波も初春ハけ年もなる  
一とといふ汝いふ用傳るや去来曰尚白ハ難あゝゝ  
湖水朦朧として春ををむむ便むく一は今日  
くは傳るとり先師曰去り古人もけ國を喜を愛する  
とをさく都におとくは去来け一言うろは徹寸け年  
近江子居たまはくは感のあゝおきんり春丹波に  
おきいもよりけ情くふす一風光の人を感動せむる  
りあなるうらみ先師曰汝や去来とも子風雅をなす  
無ふまはなりと云ふこいけい

上

二



いあ戸や鑽のきれてそは月 其角

穠叢撰の時此句をたくりその月露の月並つらひ傳ふ  
よ一丈の衆縁冬の月よお先師曰其角をそは月よがふ  
つふ句もあつたそそは月よまめ入集させしれそそは  
文字つらして此本戸とあつたり然るよお板の後大津より  
先師の文子柴の戸をあつたけ本戸なりとそは秀逸を一句も  
大切なりたとくお板におつともいそを改むしとそは凡そ曰  
柴の戸此本戸させる穠叢なり去来曰け月を柴の戸に  
奇て見れそ尋常な氣多なり是を城門とつらひしそ  
及れそそ風情あはれは相違まりとそなりなり一交もそ角の

そは月よつらひるもそはなり

よまよおまひまも時猫の意 越人

先師伊賀よりけ句を去贈て曰公は俗情あるもおたひ  
はら不出とつらひるよかいら風雅是は至りて本情を  
あつせりともなり是より先は越人名實ありく人の  
まつそそやそ穠叢句多しとそれともま至りてそそ  
本性を顯すとそなり

こかよ二日の月乃吹ちるる 荷兮

風乃地も露さぬしと 去来

去来曰二日の月といひ吹ちると働るあつりそ句に



とるる勝はりとはそ四先師曰荷字の句ハ二日の月と  
いふものついで他せりや名目と除けハさせしむるに  
汝の句ハ何とて他し〜りもんるに金神の好  
句なりた地までとうきり〜たの字いや〜とて  
虫〜好いぬ

春風よこすを離のぢる翁の尻 萩子

先師は句と評して曰伊賀の他若あ〜なるを〜と  
をな〜と〜と〜り文州曰伊賀のあ〜なるを先師を  
あ〜に教なれとそのあ〜なるを先師のあ〜なるを

清澗や波よきなり夏好月 芭蕉

先師新波の病床に予をめて曰はに蘭女の方を去〜葉は  
目もきりて見る塵もか〜と化す句も似〜れを清澗の句  
と葉〜と〜り〜の草稿詳明の方を去〜とて  
破る〜と〜なり然ともや集を去〜とて  
及〜名人の句も公を用や〜とて

涼〜と〜山より〜佛が 去来

是ハ吾光寺如來の洛陽真如堂に遷座を〜時の吟也  
と〜の冠ハひいやりと〜先師曰かる句ハ金神  
お〜と〜信するものなり又文字去〜とて  
風薫と改め〜後猿蓑の撰場を再改て今の

上



冠をせきまう

西楫やあうー終より郭と 荷兮

猿蓑撰の時を来日此句は先師の詩と横馬亭にけよ  
と同前なり入集さうー先師曰明石の時をといふ  
もやー去来曰明石のわらふを去来一付たり馬と  
舟とくへはるはる句主のち揃ふー先師曰句の働ふ  
おいてき一歩もさう付明石をとりえよいはる人  
となり終より

君の春 鮫帳を萌黄に換りぬ 越人

先師曰落句は落つるをばるるの落句ありて越人の落句既落なり  
とるゆい又おもてお来れ此句は鮫帳に萌黄に極るまでたれは  
月影船影をさして鮫帳の落句となすーさうかゝるぬは  
君の代りけて歳旦となり侍加んましく句奇麗なり

振舞や下座ふさば去るの雛 去来

け句ハ予おもふありては寸五文字言鳥帽子紙衣ふ  
いひるるり系物き下心徹せぬあさゆーや口をーや能  
類ひいさうさうー今今の冠とさして窺ひ多し先師曰  
又文章よんをさしておを信徳人の世やなるー  
十分なるるも振舞をさして振舞有ーと也

田舎屋りの夏つらかり 堂のれ 万乎



ゆゑは先師の斧正あり——凡兆の句なり様義撰の  
時凡兆曰け句又もな——除へ——去来曰るり豆と  
つらひり螢の光周旋乃景文風姿ありとり凡兆  
ゆるき先師曰兆あり——捨ハ家捨ハむ幸伊賀の連中  
乃句に是も似るあり夫を去来は句とふさんとして終  
万乎う句と成り

大とくをたもへん年乃敵うれ 凡兆

ゆゑの又文字意すくふと並て予う句也信徳曰意さうと  
並——花を誇人の思ふる切なり去来曰物はお意あり  
言人花を愛して明ると信くも我を一人を恨山せに

り迷へともいふ身命終さしめわらうと様と並ハ却る  
年のかきふらといふ花をあさ梅なりむ信徳なり  
そろえにきて先師を語る先師曰うらハ信徳を知とら  
あはれとなり去来凡兆大年と冠寸先師曰謙は一日  
千年のかきふらといふも並くも花と大笑し終る

實義も用意歌なり花乃歳 去来

先師曰花の歳とを用おれ名なるもや古人も歳の  
花とくそ中傳れ詞を細くしてかき書きう云つらは也  
月雪や舞うま名を意く並 越人

去来曰け伊丹の句に海と水とを志れと憐や舞はま



と云あり越人句入集いづれむ先師日月雪といふ歌  
あり一句働んてあつても風姿ありたふまはと憐やと  
いひて世歌とて音あふさしとも神敵の俗体とて  
趣向とて俗名とてなり侍はんをまを思ふく一又きて  
おもあつむとまり

きくくはるる夏まきまきとら蚤の節 其角

去来曰と角ハ夏ま他者まで侍るとつらに蚤のつひつま  
くくくはるるかきまきいひ海をん先師曰志うりかれま  
定家の今たりのさくてもあふるるさくくくいひつね  
侍るとまきくく一評詳なるはくく

とくく日とおの山越は花さくり 去来

是ハ猿蓑二三年前の吟なり先師曰此句いふ人  
す一とあ年を侍つとまりと後杜国々徒とす一評  
り御し侍ひく歌はうりた文と或ハす一評を花乃山と  
いひ或きこはきくくくくくくくくくくくくくくく  
と角く様さくくくくくくくくくくくくくくくく  
冬句もなかりきたるさくくくくくくくくくくく  
り侍るとなかりと後此句をかたり人もくけたりたりい  
あ年とやくくくくくくくくくくくくくくくく  
あもきくくくくくくくくくくくくくくく

上  
七







入集かし終つるやと親ふ先師曰か門人笈の小文入句  
三句抄に亦も能希あるん汝も分のこと候いつゝも也

つづきの歌茶乃下れさむさか 夫州

先師難波の病床ふんに夜伽の句をすめて曰今日  
より我々死後の句なり一字の相談を加わぬのすも也  
戸海くの吟とも多く傳りたり此句能く夫州あること  
のさかかると時きうの歌情を新傳の興を發し  
景とさかるとに豈いと備あるんやとけ時を思ふ傳る

下京や雲つむらへ能お乃兩 凡兆

は句初に冠なく先師をさしめいろくと云傳りて

け冠極め給ふ凡兆あと答ていさる落意に先師曰兆汝  
子かゝに此冠を重し一若も亦も能あつと我二たい  
能體をいふしつとたり 去来曰けみ文字のよきことは  
誰くも亦り傳りとは是外子あるまゝといふを能傳ん  
けり代門の人を傳へて獲いといふ月も冠重し  
そりといふとたり能押を又こけにきをうりあると  
おもひ傳る也

猪乃藤よりくや明能月 去来

此句を親ふ時先師志をく吟して兎角どのもは  
予思ひ得る先師といふも歸り傳り能無しの意を



知のそんやとさうくのおーをり傳はる先師曰もむも  
しつゝおむ言人もよく知れんをそ明ぬてて跡をうり  
山よ入る志々然おとひ送る歌の上風とさうありたる和歌  
優美のくはましくおきてかけと他ーとる我俳諧自由の  
くへまた尋常れ氣文と他せんを更子と柄なうへー  
一句おもしうぢおはる皆あしぬはる兎角の詮あら  
あへーととなり甚後おもはにけ句ハ郭をなきつるごと  
いつる後徳大寺の歌の同業をいよくと柄なきこと  
知れり

薩州葉のーー

何とよんはるんはるんはるん  
尾花の人の句と

け句を薩の葉の谷風よ一すち山峯よと喜吟く一と句とさ句を  
ぢー平先師のけ句と結ぶ先師曰發句ハ郭のそくはゆ  
すていひはるも然ふあはるなり支考かすくたて  
大に盛驚るーとて發句といつ物發氣傳るとてけ  
も然く有り有り平と時も管束もさるーとるたや此の  
あつてもなうと忘傳るといふ中意ふらん

下跡よつとつけとやいとさうら

先師語よとて浩然と此の其角々集ふけ句ありいうに思  
う入集ーとむと去來曰いとさうらの十分のさうら  
おくいおむせとるも傳へすや先師曰いひ課と何れ



予らよたのそり肝を銘とるるありとてめを後句をなす  
つふとてぬすき事とぞ知れり

子減る川中を流るり 續月 去来

魯町に別居時句也先師曰け句意一とらつて  
あつた切なきたつひまきつてつたなり云来曰  
いふもさしてふた事と句よてあやけりともあり  
志うれもいする十分と解せし予々公中山一物傳れとも  
句よめあつたれすと見ゆは是ハ意到句不到也

泥亀や苗代水乃 睦一川王 史邦

猿蓑の撰に予諤て睦つとひと書入り先師曰睦つり  
と傳ふと秋容風流各おなり疎小睦つりして極言なり  
ともゆり杆粟の氣色とあやまるとの筆跡衆のこに  
あつた句とさつりおわろとさつた故なりとてまけん  
何一りとも

志つてに寐れと涼い夕暮 宗次

さるる能撰の時句一句の入集を彩ひて秋句吟し傳れ  
るつた句が一一夕先師の傍に傳りてさふいさうは  
るき給へおもいおんとおほせられしをいひて  
志つてに居れと涼い夕暮とて先師曰  
是しを後句なれとて今の句よ伝りて入集せしめたり



君相の美なりや親乃親 去来

ろくめハ面影のおほろみゆー 鬼奈とのふ句なり  
此時添書ハ祭時を神いすす如ーと申む君相の美  
なりーく是傳るすーと申増る先師返事ハ君奈をの言味  
なりーけかまてハ言ひる處中無くハ註ハ君相の美  
ありーやと傳ると何とて句ふなきるやと伝るる  
ー ぬひり

夕す良氣転らーて帰る 去来

予ハ初學の時落句は中々歎けるに先師曰落句ハ  
句はよく餘意たりーくに他すーと申り試ハ此句歎

賦して歎々傳又是もも大笑ーぬひり

はくあふるともたけや麦畠 游力

凡此日 是麦畠を麻畠ともぬきん 去来曰麦麻に  
なりてもよもなまりてもくーと申り論ハ先師曰  
又少くぬはぬ論くーと傳ーと用なりと割ー  
ぬりぬる人 奈せよ

いそーや沖のーく帆の美帆片帆 去来

去来曰猿蓑を新風の始なり時雨を此集の美目を傳  
ふ此句はそとを傳るた 菊明や片帆をくけて一時西  
とくーいそーやよりも句はよりく人の福とる



まくかゝん美帆もそ然くらよも子そん先師曰沖の  
時雨とりよも又一ふーまそよりーされと句ハるるうにわたり  
傳へしとかなり

兄才然然見わいすやほとむん 去来

去来曰此句ハ五月廿八日當我兄弟の互に教え合ふる日子親なるも  
くちつとむりーサうー光源氏の村畠の朝端またすもほひーと  
紫式部うたむいやりーと趣をうりて他す先師曰當ふとふーとハ  
すかうー一句いまーいおわせんさ角々評も同前なりと  
深川より評ー評六曰此句ハ公勝りて細たふん  
去来曰ん勝りて細くすといんハくうりありたふん

おほせぬとも評すー大州曰今然他志ハさかー  
うけぬりぬねと是あき合兵の目なるーとたふ笑たり

みけと教自にむいよ横雲

まきーいおむり花の咲らふま 去来

先師をす川庵りと花見の音をきまうひうりと付傳るの  
先師の教つまをうーとさんそ又あをきま此句を附  
かむす先師曰いうた思ふて附せー傳るや平曰朝雲の  
のうに撒嬌よりーとらんそ初に附傳れと能るよば朝雲乃  
まけいなるけーとらんそ初に附傳れと能るよば朝雲乃  
附せー傳るといふ先師曰やちり初の句あハ二十指かゝるー



於法なることありしとて今姑み文をよはせりたり

梅よりすくめ枝乃百なり 去来

去来歳旦の暇なり先師深川より圖て曰は梅は二月の  
氣となり去来いつにむい語と歳旦の暇より用ぬ  
くるとふむ

船より月乃西園乃馬 彦根の  
句

許六ろろとれ矣とてく時此句より長とけり  
先師曰いすくふとけりしき句をまきのけり  
とけり長ありしとて上京の時けり何ゆゑふ  
并帳より傳や先師曰船の中より馬の顔よりけり

了西園の馬とていふことありしとていふ相なりとけり

弓法乃角乃出乃月乃雲 去来

去来問曰此句もとけりなむとて先師曰とけり  
雲も角も弓張月といふことありしとていふ

丁稚乃擔乃水乃かゝり 元兆

初き書なり元兆曰尿書のりも中しき先師曰  
嬌くくはさけと不韻とらやも二句は過くくは一句  
なるともいふことありしとていふ

赤白 ほんらめけりし蓮乃実

咲花よかまかば椽のかゝり 芭蕉

止

止



此句出る時去来曰わが前句をの守りてこれと刻  
業し〜と皆くなく先師は附句と云ふ〜と云  
新丁を附けしれ

くろみそ高き標本乃森

咲花は小き門を出つ入川 芭蕉

此句出る時去来曰前句全標本の森の〜と云  
いつそおまを文を失ひ花を附するのむつ〜  
う新〜と先師の附句を云ふは是れ付て見せ給ぬ

後乃森まふに〜川る日の新

なく〜も小き草鞋り〜と云 去来

先師曰よき上篇の旅なる〜と云これと云て此句  
此句と附けり〜好春日上篇の旅と云〜と云下句  
出〜蕉門の徒の終練格別也と感す

二つはワ〜 雲乃 秋風 正秀

中連子中〜りあ〜月影に 去来

正秀亭の才三なり〜と云 升格子影もあ〜と云月影に  
と付けり〜と先師〜と云斧正〜と云〜と云お〜もに  
曲翠亭は宿す先師曰〜初て正秀亭は余の  
珍客なり〜と云我なる〜と云〜と云悟〜と云  
〜と云後句と云〜好悪を云〜と云迷〜と云



一板のちとあつてくつあつてゆく後句は時をくつあつてゆく  
乃今むなしくむねり不真のいふなりを我々後句を  
出す一とそそおき先師の後句なり一正木乃忽  
脇を賦に二つは内とそけい雲の氣をなすを  
かくれひやくふ骨之三附よりお前のけいまを掃く  
未練のそりなりとおすといふり後ひく去来曰く時に  
剛毅も多しひくたつて山をえそそそ一白ゆりく骨を  
たつ月の後文はさやけをえいそんとおこなつて信を  
つぎれゆくもゆふ先師曰く句をえいといふてくおま  
あんなは骨の徳の恥と一度すうんを思ふ一と也

ふあなり一に忘る一うく 去来

沙芽生におもしうけつく伏見扱 芭蕉

先師京より野坡方の文は此句を去出一はそこの他者  
いすは意味をえおれんとももと随分難しきとりまふ  
毎の〜はと也

赤人の名をつうけりて川流 史邦

先師曰中の七文字よくたうけり後句の長き〜の意味  
とくち〜は

駒亭此本著やいつん之日の月 去来

そや〜ん月月の約といふ〜り〜る本著やあ〜ん



三日の月といつる先師曰此句を筆用と人今世の句  
なりとあさあり終つる

上終

うらやまし

まじりて

寛政四年四月下旬

越后船錦水閣瓢哉主



